特集●善光寺開創三十周年

二十一世紀に向かって真実の種まきを

――横浜善光寺開創三十年の歩み――

善光寺住職　黒田武志

横浜日野公園墓地の正門近くに、善光寺を開創したのは昭和四十四年（一九六九年）。あれからまたたくまに月日は流れ、生まれたばかりの何もない赤子だった小庵・善光寺も一歩一歩足跡を残しながら、三十歳という年を迎えました。孔子の言を借りるなら「三十にして立つ」、人間で言えばそろそろ思想も確立、護るべき家庭を築き上げ、社会的責任も重くなりつつあり、その中で将来のビジョンをしっかり描いて精力的に活動している年齢です。まさに今、善光寺もそんな時代を迎えようとしています。

まだ世の中のことが何もわからない新寺に、母親の慈愛ともいえる無償の愛

現在の善光寺

によって乳をやり、手をとり歩き方を教え育ててくださった方々の顔が、目を閉じれば瞼の奥に数多く浮かんでまいります。善光寺の開基となられた慈愛溢れる大阪の村岡社長（ナリス化粧品）をはじめ、さまざまなかたちで寺の護持に尽くしてくださった先生方、そして、温かい目で見守り続けご支援くださった檀家のみなさま……。言葉ではいい尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。

この間に、尊敬する方々ともこの世での辛い別れも数々経験しました。人生の財産となったすばらしい出会いを思い出しながら、いまだ僅か三十年、善光寺が歩んできた道をふり返ってみたいと思います。

厳しい修行時代が私の原点

善光寺誕生までの私は、大いなる佛さまの胎内宇宙で、もがき苦しみながら、如何にして自分が生きていくべきかを模索しておりました。自分の意志で生を納得しうるものに再構築することが自己に対する義務だと思いながらも少しずつ少しずつ栄養分を与えられ生かされていることも気づかないままに…。自分なりに少しでも成長しようと懸命に働いて来たつもりでいた。若き日自分に起こった諸々、すべては誕生のための体を作る栄養分となっていたことに気づく。

栃木県大田原市で小さな寺を営んでいた師父・黒田白純大和尚と母嘉（よし）その八人兄弟（一人は夭折）の六男坊、名利を求めず貧を憂えぬ父母。当り前だというならそれまでですが父母は家中に神仏を祀り、朝夕敬虔にそれを拝し、神仏を恐れている様子でした。決して裕福ではない寺の大家族。父母の貧しくとも、清く美しく生きる者を愛する気概は少なからず幼少の私たちに大きく影響を与えてきた。子健やかなれと願いつつも先に幼な子を失った父母の悲しみは再び同じ悲しみ辛さを世の人に味わわせたくない。みな健やかに育ってほしいという願いはいつしか〝子育て地蔵〟の建立になったという。利他行の精神を持つ父のもとで育った私たち兄弟、心もちだけはみな豊かでした。

私の学生時代、すでに僧侶となっていた兄博雄（前角老師）は、修行ののちアメリカに渡った。開教師として道を志すその兄を慕う私は必然的に海外に目を向けることとなった。国を分かち隔てることなく、識らず〳〵世界的規模で〝人間〟というものを観るようになっていったのも、兄前角老師や、開かれた視野を持つ兄たちのおかげだとつくづく思う。

やがて尊敬する兄たちの勧めもあり、いわれるままに駒澤大学から大学院と進み、曹洞宗大本山總持寺、そして永平寺に坐し、全国托鉢行脚を経て、再び總持寺に修行。のち釈迦牟尼仏の足跡を歩きタイでの修行の時を経て、次兄のいるアメリカに渡れたのは三十歳のときでした。

大田原光真寺

私にとって二十歳代での修行は、並を越えており、その過程ではいささか人の尊さ、ありがたさを知ることができたことは、自分が伝導者としてその原点を探り当てることができた貴重な体験でした。僅かなことで迷い、苦しむ人を救い、世界の平和と人類に寄与するためには何を学び何を実践し、どう行動していけばいいのか――さらにはそれを積極的に具現化する力の源泉となり、生きていくうえでの肝腎な体験だったと回想します。

ひるがえって永平寺での修行中、心の疲れ、思いの貧困さから身体の具合が悪くなり、ついには「延寿堂」（病室）に入ってしまいました。時は流れ得ることのない自分にイヤ気がさし、いっそのこと家に帰ってしまおうと思い、暇をいただき、東京を目ざしました。しかし、私にはお金が一銭もありません。何とか友人から少し借りたものの、とても東京へ行く電車賃にもなりません。ムダなことはできません。駅までと道すがら歩いたのが、私の初めての托鉢体験となりました。夕方、托鉢でいただいたご喜捨を握りしめ、駅へ。お金を数えてモタモタしている私に、「入場券で入って中で精算してください」と駅員さんは優しく言ってくださる。まもなく発車という電車に飛び乗り、アア、よかった、と一安心。流れてきた車内アナウンスに電車が東京とは反対の、〝富山経由直江津行き〟と告げられ、身体中の力が抜けてしまいました。しかし私の意志とは裏腹に、このとり違いから私の運命も方向転換、とび降りるわけにもゆか

總持寺修行時代

ず、導かれるままに。あれこそみ仏のお導きだったと今は思えるのです。

お蔭さまでその日が、私の全国托鉢行脚のスタートと相成ってしまいました。

仕方なく富山で下車し、思案の上、大学時代の松本のいるお寺を訪ね泊めていただくことにした。「黒田先輩どうしたんです、永平寺ではなかったんですか」「いま、永平寺を乞暇し、やり切れんから逃げてきた。これしかじかで、今晩泊めてくれ」と頼んでみる。幸い草鞋（わらじ）を脱ぎ暖をとることができた。以来毎日、托鉢をしながら歩いた。能登には、大本山總持寺の祖院がある。松本君のすすめもあり折角ここまできたからにはお詣りしていきたい。これこそ禍転じて福、来る日も来る日も托鉢することになった。托鉢するとお金がたまる、無心に歩くから疲れもなく、どんどん体調もよくなる。北陸ではお坊さんを格別大事にしてくれる。どこの家でもご喜捨してくださり、応量器はたちまち一杯になってゆく。「これなら日本一周しても生きていけるんじゃないか」などと簡単に思い込んでしまった。日本一周――「托鉢」この言葉が頭に浮かんだのにはいまひとつの理由がありました。

私がまだ、大学院卒業まもない九月、永平寺に修行に出かけようと思って準備をしていたときのこと。

当時私は、東京五反田、八畳の本堂と六畳間だけの小さな寺に住んでおりました。お彼岸に入った翌日。その夜半、本堂の戸が開く音がした。台所からの

応量器

ぞくと、三十代後半ぐらいの一人の男性が正面に坐し、何やらご本尊さまに手を合わせ拝んでいる。咄嗟に私は、「どうしたんですか」と尋ねてみる。この男、ただ事でない顔つき。

「私は殺されるんです」

と、恐ろしいことを言う。聞くとまっとうな仕事ではない。今日も借金の取り立てに行き、自分の生き方がつくづくいやになったという、稼業とはいえ親分の命令には逆らえない。幼い子どもの見ているテレビや洋服ダンスを借金の形にと持ち出したら、その母親や子達に、

「あんたらは鬼だ！」

と泣きながら罵られたそうです。

そこまで言われて生きるのはもう真っ平だ！　オレの人生もおしまい、自分で死ぬか殺されるか、先はない。悪いけど此処に来てしまった、という。この男性、仏性に目覚めたか。稼業をやめる決心をし、親分に背いて逃げてきたとのことでした。

「和尚さんワシを助けてくれ」

うつむきながら語る男性の話に、私はただ驚くばかり。大学院を出たばかりで、まだ世間の血なまぐさい話などどう聞けばいいのかどう処理してよいやら見当もつかない。

とりあえず、警察に行くことを勧めましたが盗んだり殺したりした訳でもない。もうこれ以上警察には迷惑はかけたくない、と合掌し深刻な顔をして言うのです。やがてふところからナイフを取り出し、ここで死なせてほしいと頼むのです。

「チョッと待て、ここで死なれては私が困る。そこまで言うなら力になろう。どうする」

と聞くと、北海道に行きたいという。金はあるのかと聞けば無いという。北海道まで行くには少々では済まない。力になるといったからには後にも引けない。とり敢えず手当たり次第お彼岸のお経料、私の洋服、学生時代に着ていたトレンチコートなどかき集め、さらに仏さまのお供物まで手渡しました。

この寺を出たとたんに捕まって、殺されてしまうかもしれない……そう思うと、胸が痛む。いつの間にか私まで人に追われ、逃亡せねばならんのではないかと錯覚していました。

「もしかしたら、この世で最後の出会いかもしれん。万一、あなたに何か起こったら、私がご両親に会って、あなたの気持ちを伝えたい、ここにご両親の住所氏名を書き残していってください」

と、半紙と筆を渡しました。男性は一瞬躊躇して、書く文字を考えるような顔つきで、名古屋市のとある住所と名前を書きました。それを受け取り、私は

總持寺修行時代

無事を祈る意味で、

「どうぞ親御さんに心配をかけないで下さい。あなたを今日まで育ててくださったご両親とご先祖さまに、お礼だけは述べていってください」

と言って、〝○○家先祖代々之精霊〟と塔婆に書いてお経をあげました。

合掌したあと、男性は追われるように手に荷物、自分のはいていたボロボロの靴をひっかけて、暗闇のなか、振り向きもせず消えていったのです。

以来、何日たっても何カ月たっても、連絡はありませんでした。もし、すでにどこかで殺されて、見つからないままだったとしたら…。あの時私が泊めてあげ、かくまっていたらと後悔ばかりが先にたち、私は日に日に心配になっていったのです。

無理にでも引きとめればよかった。もし殺されたとしたら、私はたいへんな罪を犯したことになる。助けてくれと頼まれて助けてやれなかった。人間どんな命でも尊いもの、自分が正しいと判断し、下したことばにはその責を負わねばならない。私は目に見えぬ神仏の厳しい試練にさいなまれていた。

その頃、何か言い知れぬ背の重さに耐えられず、ある決意をする。

このときから、日本一周托鉢行脚しようという決意をかためておりました。前々から、〝宗祖を通して釈尊に還れ〟というのが私の誓願に似た気持ちでしたので、藤井日達上人のお力で、全国各地に祀られているお仏舎利を巡拝したい

という願いを持っておりましたが、そこに新たな使命が加えられたのでした。あの男との出会いが、漠然とした願いを払拭し、実現化させたのです。

永平寺を途中で乞暇して、さらには乗る列車を間違え、忘れかけていた托鉢行脚を思いたち、行脚の旅に出る。旅の始まりは富山。この時終点は名古屋と決めた。あの男のご両親を尋ね約束も果たしたい。そんな気持が強くなっていました。すっかり動機、目的も出来たのです。

歩きはじめのころは、応量器も何故か一杯になっていた。しかし、いいことばかりではなかった。

ある時、娘さんに、つめたく、迷惑そうに、

「お通り！」

といわれる。そんな時腹立ちや悔しさが生まれる。また立派な大きな家なのに少ししかご喜捨がない、つい不満や愚痴が出てしまう。一向につまらない自分に気づかないでいる。

しかし不思議です。雨の日、風の日、暑い日、毎日毎日托鉢三昧の日々を続けていると、なんのために――と気づいてくる。やがてそうしたこだわりの心が薄らいでいくのです。

『般若心経』の真言「羯諦羯諦（ぎゃーていぎゃーてい）　波羅羯諦（はらぎゃーてい）　波羅僧羯諦（はらそうぎゃーてい）　菩提薩婆訶（ぼーじーそわか）」を繰り返していると、その意味が、「行こう、行こう、彼岸に行こう。苦しみのない

般若心経

世界へ行こう」というようにきちんと魂に入ってくる。不平不満愚痴のことばは遠ざかり感謝のことばが胸にこみあげ、心からそう願って唱えられるようになっていったのです。

それでも、雨風、空腹、野宿といった毎日は、辛く厳しい、逃れたいという思いがまた起こってくる。京都では、三日三晩、暴風雨にさらされ、草鞋（わらじ）は穴があき、袈裟や体全体からは馬糞の臭いがするような状態になっていました。いろいろな理由をつけても、だんだんお寺にも泊めていただけなくなって、とうとう「涅槃金（ねはんきん）」（不慮の死を遂げたときの葬式代として必ず托鉢修行者が携帯している最後の最後のお金）という、つけてはならないお金まで手をつけるほどになりました。

宿賃二百五十円の木賃宿にやっと泊めてもらえることになりましたが、宿のお風呂を使うことはやんわりと断られる始末。私は雨の中を一キロほど歩いて銭湯を見つけ、何週間かぶりに垢を落とす。帰り道、パンと一口分のバターとお酒を一合だけ買って宿の部屋に戻り、残った涅槃金を出してみる。手許に二十五円。「俺の命は二十五円…」思わずつぶやいていました。明日の命もわからない、それがその時の私の姿。

翌朝も雨。ご喜捨も望めない雨の中、宿を出ていかなければなりません。

「俺はいったい、何を求めているんだろう」

貧しさとみじめさのどん底で、私は窓を見ながらボンヤリと考えました。次の瞬間、サーッと霧が晴れたように答えが現れたのです。

「俺は僧侶じゃないか。自分の命を気にしている場合じゃない。俺の今やるべきことは、ただひたすらにお経をあげることじゃないか」

これは、仏さまの囁きだったのかもしれません。

私は宿屋のご主人に、出て行く前にお経をあげさせてくださいと頼みました。一心に『般若心経』を唱えているうちに、私を追い払わず一晩泊めてくださったご主人の優しさや心づくしがありがたく身にしみてきました。人の情がわかったときは、目頭が熱くなる。お経をあげ終わって出ていこうとすると、ご主人が、

「お坊さん、腹へってるんだろう。朝飯食べていきなさいよ。」

本当に、世の中の人はすべて、仏さまだとしみじみ感じて、私は手を合わせてしまいました。

感謝の思いに心が満たされると、昨日までは辛かったどしゃ降りの雨もまったく気にならなくなりました。京都から亀岡の街までおよそ五里。私は大きな声で『般若心経』を唱えながらひたすら歩きました。

そして。しばらくすると、チャリンと応量器に十円玉の入る音がしました。ふと顔をあげると、一人の女子学生。観音さまのような微笑みをたたえ、私の

托鉢修行時代

前に立っています。私が歩いていたところは、ある女子校の校門前だったのです。十円の尊さ。ありがたさ！

チャリン、チャリン…。出てくる女子学生がみな、ご喜捨をしてくださる。応量器はたちまち一杯になったのです。

感謝で胸がいっぱいになったとき、小降りになっていた雨がすっかりあがり、雲の隙間から太陽の光がパーッと差し込みました。

ああ、私は生かされている！　私は生きているのだ！

まさに万感胸に迫る思いでした。

生かされている尊さを実感し、以来、こわいことも嬉しいこともみなすべて超越して、来るもの皆よし。すべてありがたいという心境になることができたのです。初めて、仏の教えの真の意味に気づいたような気がしました。自分はそれを学び、伝えていく役割を持っている〝僧侶〟という仕事を選んだことに、はっきりとした使命感と喜びを感じたのです。お金には執着がないはずなのに、チャリンチャリンを聞くごとに、考え方まで変わってしまう自分、まこと修行とは紙一重。恥ずかしいけれど大いなる転機の一瞬でした。

お彼岸の夜、私のところにきた男のこと。名古屋で彼の両親を探してわかりました。実は詐欺師、以前までの私なら、「だまされてお金をとられた」と腹を立てたことでしょう。しかし、詐欺師のおかげで、私は日本中の仏舎利塔（ぶっしゃりとう）の巡

拝ができた、よく見れば自分もまたみにくい心。詐欺師と左程変わるものではない。お蔭で人生の転機ともなるような尊い修行をさせていただいた、感謝こそすれ、責める心も起こらず本当にありがたく感じたのです。

いまさらのように、人生（みちのり）には、まわり道をすることによって、新しい発見のあることも知りました。人生の地図も読み方、読む心次第で自由に変化するのです。

全国托鉢行脚を終え、自分の愚かさ、自分の弱さ、自分の貧しさ、自分の拙さ、自分の小ささ、自分の無学さ、自分の無能さを再発見した。このどうしようもない自分、それでもそんな自分がいとおしい。――だからこそ、いま一度精一杯努力し、修行し、自分を高めていく必要を痛感しました。悔いのみ多き日を省みながら昭和三十八年、大本山總持寺に開設された特別僧堂第一期生として基本から学び直そうと上山安居することにしたのです。

道元禅師が説いた真の仏道

私が学んだ仏教は、釈尊（仏陀＝真理に目覚めた人）の教えであり、仏になるための道を説くものです。教えは、あまりにも広大で深い人間観、世界観、宇宙感があります。インド、中国と経て日本に渡ってきた仏教ですが、膨大な

仏教経典の中からある一つを選びだしそれを拠り所としながら年月を経てさまざまな宗派に分かれてきた経緯があります。

その一つ、曹洞宗は道元禅師（鎌倉時代に中国から禅を持ち帰った）を開祖とし、瑩山禅師によって広く世に知らしめられるようになりました。坐禅を主とし、いわゆる禅宗の一派を拠し、現在では一万五千カ寺、僧侶一万七千、檀信徒約八百万という大宗門となっています。八世紀に亘って絶えることなく脈々と受け継がれ広がってきたのは「真実の道理」だからでしょう。時代がどんなに変わろうとも、道元禅師の教えは絶対に変わらぬ〝普遍的な真実の世界〟、つまり人生の根本的な問題、その解決方法を実際に即してまとめたのが『修証義』でした。道元禅師は、生きていく上で生・老・病・死、生けるものの避けて通れぬ大事があるといい、人生は即ちこの四苦であると気付かせ、次はその苦の原因を尋ね、そして苦を除く道を見出し、さらに苦のなくなった「安穏の境地」に導き入れるのが釈尊の教えだと説いています。人間は誰でも「生が決して充実していない」と気づいた時、坐禅をすればたちどころに「自己をならう」ということに通じる。「自己をならう」というのは生死の実相を明らかにし、人生の真実の意味を見出すことに通じ、こだわりの心、とらわれの心から脱却し、自由なあるがままの「本来の自己」の姿を発見、人はそれを受け入れ感謝して生きていくことこそ人間本来の美しい生き方だと教えています。

学びを深めれば深めるほど、私は急がなければならないことがあります。良い意味では科学情報時代の進歩であり、一方においてはこの宇宙、自然、地球環境の破壊・破滅に関わる科学の進歩です。人間が驕り高ぶっている限り、大変な事態が迫ってくることは確かです。人道的、人間的でない科学、知識の進歩しすぎた社会ほど恐ろしいものはありません。ここで大事なことは破壊する科学の進歩と使い方を誰がコントロールするかということです。一方では宇宙、自然を保護しようという運動は結構です。しかし間違いなく「人間は宇宙、自然に支配され保護されていることを知る」べきです。道元禅師の言われる「諸仏は仏性にあり」というこの哲学的背景を人間がどのように信じ、どのように行動するかが一大事です。

私も托鉢修行体験で、そのすばらしさを実感しました。

道元禅師が弟子たちのために仏法の真髄を説いた書『正法眼蔵』は、「生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり」と真っ向から生と死のいみを明らかにし、それを理解して生きていくことが人間にとって唯一最大の大事と教えた日本最高の哲学書といわれています。修證義は「懺悔滅罪（自分のおろかさゆえになせる罪を洗い清め消滅させる）」「受戒入位（仏の子としての道に従い、それを受け、護り、仏として目覚めさせていただく）」「発願利生（苦しみ悩みの世界に身を捧げると誓って、世の人のために奉仕する）」「行持報恩（日々

總持寺修行時代

の暮らしの中で生かされて生きていることを感謝し、そのための行を積み重ねていく)」などが書かれています。これらはすべて、何か目的を遠くにおいて行うのではなく、その「行」ひとつひとつ、瞬間瞬間、一所懸命行うことの大切さを教えてくださっています。

しかし、いくらすばらしい教えでも、生命をかけて後世に伝え残し教化していこうとする伝導者がいなければ、時の流れに教えも人類も滅びてしまっていたことでしょう。これは、未来永劫どのような新しい時代にも言えることです。

もし世の中の一人ひとりが、本来の自己をならい、人生問題の根本的解決を「行」として、命がけで取り組むなら、いかなる深刻な問題もたちまち解決するのではないでしょうか。世界中が抱える環境問題、あらゆる民族間の争い戦争、飢餓、たとえどんな問題であれ、すべてはこの〝自己〟の「ならい」に帰着すると言っても過言ではないでしょう。

迷いと苦に満ちた世に光をあて、救済していくというのが釈尊の思想。あらゆる聖者の説く教えも、すべてここに共通しており、どの宗派といえども、正しい仏陀の教えを求めているのに違いはない。また世界のさまざまな宗教宗派も、終極、真に世の中を明るくすることを主願とし苦しみを消し去り光明化した平和で幸福な自分、世界にしたいという願いは一つのはず。

人類みなが心を一つにすれば！

「宗祖を通して釈尊へ還れ」――これが私の「生きる」の原点でした。

人類はかつてない不安と絶望の危機に見舞われています。それだけに、世界的視野に立っての相互理解と、代償を求めない大いなる慈悲が必要です。自らの宗教宗派にとらわれず、世界中の宗教を知り、学び、理解し崇敬してこそ、すべての人が真理に目覚め、幸福と平和を祈りつつ生活し〝釈尊〟の教えを正しく後世に残せる人間を育て、また自分もその一人になりたいと悲願しています。

この私の願いは、後に、〝善光寺留学僧育英会〟というかたちで実践、実現の一歩を踏み出すことになります。しかしまだ修行中の身、現代の日本仏教と寺院のあり方に疑問を感じ、宗教者本来の使命と役割を発揮するためにはどうすればいいかを日々模索していました。

宗教本来の役割に目覚めて

總持寺での修行中、夏季摂心会という坐禅の会で、たまたま参禅者の中に村岡満義氏(ナリス化粧品社長)、そして常務取締役・東郷敏氏との出会いがあり、そこで劇的なできごとが起こりました。このことは後で詳しく述べますが、その後修行を終えた私は、お二人の協力のおかげで、仏教の根幹、原点ともいえるインド、そして上座部仏教といわれる二百二十七の戒律を守るタイへ修行に

赴くことができました。

そしてやっと、私の兄前角博雄老師の待つアメリカへ開教師として、また修行僧として、旅立つことになったのです。兄についても後で述べますが、「禅の精神を、宗教が異なるアメリカやヨーロッパの人びとにも釈尊の教えを伝えていくことが人類の平和に結びつくことになる」という信念のもとに、ついにはロサンゼルスに禅センターを開き教化活動を行っていました。私はそこで二年間修行させていただきました。

兄も私もふところは飢餓状態。少々入ったお金もそれとはなしに、教化活動のために使ってしまう兄でした。若い私はいつも空腹。アメリカといえども日本では考えられないほどの貧しい人たちもおり、その人たちの飢えに比べれば私は恵まれていると感じました。私のすることはただひたすら坐禅を組み、経を読み、その日その日のできごとを見たら書き、聞いたら書き、読んだら書き、行ったら書く。書くことによって、つかんだものがより確かなものとなり、この「くり返し」が「積み重ね」となり、感動が深まってきました。この習慣は今でも続いており、そしてこの積み上げは、膨大な量になりました。そんな生活の中で私の魂も浄化、いつしかひとつの大誓願を立てたのです。

「日本に帰ったら、新寺を建立しよう！」。そしてそこを拠点に釈尊の説かれた教え――人々の心を救う正しい教えを伝え、世界平和と人類福祉の向上に貢

㈱ナリス化粧品社屋（当時）

献すべく、憩いの場所に発展させたい。

仏教、寺院……と聞けば、大概、「死」にまつわる葬式や法事といった儀式的なことだけが思い浮かび、たしかにそれらの儀式はとても大切なことですが、儀式の意味もわからないまま形式的に行っても何にもなりません。現在に「生きている人びとの心に安らぎを与えること」これが宗教本来の使命であり役割だと私は感じるようになっていたのです。

仏の道にかなった正しいことをしようとするのであれば、必ず仏が助け、導いてくださる。私が今しなければならないのではなく、せずにはおられなくなっていました。来た道が分かればゆく道が分かる、おるところが分かれば行くところが分かる。大切なことは来た道であり、今おるところです。すでになにかしら、私が寺の建立を思いつく前から、そのレールが引かれつつあったのではないかと思えるのです。

昭和三十六年(一九六一年)、林堅峰和尚が、私の師父、黒田白純和尚の勧めにより、善光寺の現在地に小庵を建てられましたが、志半ばにしてお亡くなりになりました(昭和四十三年)。まるで林和尚に導かれるように、私はアメリカから帰国。すでに引かれたレールに乗るかのように翌年(昭和四十四年)、横浜市営日野公園墓地の正門脇にある小さな寺を訪ねました。しかしこの寺、事情重なって、すでに人手に渡っていました。でも私は此処を尋ねたとき、

「私の求めていた、やすらぎの寺はここだ！」
と直感しました。墓碑二万基を擁する壮大な日野公園墓地。ここに集まる多くの人たち、神戸、長崎、函館と並ぶ国際都市、横浜のど真中、私はその小さな寺を布教の拠点として、世界に向け新しい情報の発信基地として活用したい、さらには檀信徒の研修センターとして、仏教の本来の使命と、国際化を果たす拠点として育てあげ、理想的な寺院を創ろうと決意したのです。そしてこれこそ自分でなければ出来ない仕事だと思いました。

私はまず、總持寺で出会って以来仏縁を結ばせていただいていた村岡満義社長と東郷敏氏に相談をしました。

「実はここにどうしても寺を興したいのです。私は急いでいるんです。どうしても此処で私の仕事として人心の救済をやらせてほしいのです。でも、お金がないんです」

単刀直入、ありのままを話す私に東郷氏は驚かれたようです。主旨を理解された東郷氏は即断、すばらしい実行力ですぐに動いてくださったのです。しかし私はその集め方に注文まで出してしまいました。

「会社単位の大きなお金ではなく、一人ひとりの小さなお金を沢山集めていただきたいんです」

と。東郷氏は「先生も無茶な注文をされるもんだ。主旨はわかりました。仕方ありません。何とか工夫しましょう」。やがてこの願いは大きな実を結び、東郷氏の仕事柄全国津々浦々、北海道から沖縄まで、私の面倒な頼みごとも快く引き受けてくださったのです。

やがて私の「趣意書」とともに、東郷氏の「お願い文」が全社員全取引先に向けて届けられることになりました。

趣　意

今般拙僧旧来の仏教に頼ることなく一宗一派の偏見にこだわらず大聖釈尊の説かれた生きた正しい仏教を高揚し、世界平和と人類福祉の向上に貢献する念願の許に新寺の建立を発願いたしました。

真の平和と人類の幸福は正しい教えに依って創られるものであります。

物質文化の発達。混沌とした現代に於いて迷える多くの人々に心のやすらぎと幸福を与えるものは宗教に依ると信じます。

横浜市南区日野公園墓地の一角で日本の玄関口ともいえる場所を選び「禅」の道場として青少年教化育成・檀信徒の布教教化活動その他多くの人々の心の憩いの場所として正しい信仰活動をいたす念願であります。

冀(ねがわ)くは、趣旨に御賛同賜り御支援、御芳情下さるよう伏して懇願申し上げ

ます。

昭和四十四年八月吉日

発願人　黒田武志謹書

お願い

各位には益々ご機嫌麗しく新年度に力強く臨んでおられることと存じます。

既に一部にはご案内致しましたが、予てより坐禅を通じて親しくご指導頂いております黒田武志先生が、発願利生、いよいよ独立して、横浜に新寺を建立されることになりました。黒田先生は此の新寺を通じて、いよいよ、広く、深く、人心を救済せんとして一大決心をなさいました。この理想に燃えた黒田先生に、社長は痛く敬服、できる限りのお手伝いを致したいと念願しております。黒田先生は申し上げるまでもなく、社員に初めて坐禅を説かれ、總持寺（大本山）の雲水として修行する傍ら、若くしてインドに佛跡を尋ね、その真髄を学び、のちアメリカ本土に、全心身を投じ二年間佛道・坐禅の布教に没入されました。又、自らの修行に励み今日があります。

この度はさらに人心を救済すべく、人づくり国づくりをモットーに新寺建立の英断をされたのであります。別紙に黒田先生自らの新寺建立の趣意書を

同封致しますが、どうぞよくご覧いただき、一人でも多くのご賛同寄進得られます様ご案内致します。先生は何故か非常に急いでおられます。この新寺建立にあたって先生は、ナリスの皆様に頼る他はないと申しておられ、皆様の御援助によってのみ新寺建立の第一次計画は成就することになります。社内は勿論でありますが出来る限り関わる方々に広くご案内下さればよろこびであります。

どうぞ絶大なるご協力を賜ります様にご案内申し上げます。

昭和四十四年九月吉日

発起人代表　東郷　敏

他一同

東郷氏が呼びかけてくださって二カ月後。なんと約千名にのぼる社員から当時の金で一千万円。多大の浄財を喜捨していただくことができました。善光寺の第一歩は人から人、心から心、魂から魂。数多くの尊いみ心のおかげで踏み出すことができたのです。

その年の十一月、宗教法人「善光寺」の認証を受け、村岡満義氏（現・株式会社ナリス化粧品―初代社長―）を開基（寺の開創の基礎を造ってくれた人）、師父、黒田白純大和尚を開山（寺の開創者）として勧請して発足したのです。

地域に根ざす寺づくり

昭和四十七年十一月二十八日。かねてより増築工事を行っていた成寿山善光寺は心温かい方々のご支援のおかげで完成。落慶晋山式が行われることになりました。

善光寺の概要として、趣意、場所、敷地面積、総工費等の他、御開山・黒田白純大和尚、御開基・村岡満義社長の紹介。私は次のように所感を述べました。

「師匠が新寺の五ヵ寺（那須野の那須寺・玄性寺・永盛寺・ロサンゼルス禅センター仏真寺・横浜日野善光寺）を建立したいという発願を持って日夜精進努力していたのでその意に打たれて、この程念願を達成することができました。これ偏に釈尊をはじめ高祖さま、太祖さま並びに歴代祖師の御徳と諸大徳並びに先輩、後輩、檀信徒各位のご援助の賜と深く感謝合掌いたしております。

今後は檀信徒の皆様と共に仏法興隆に精進努力をいたしたく覚悟をしております」。

当日の模様は、青年新報によっても詳しく報じられました。

落慶式に出席した中外日報東京支社長・本間昭之助氏は、青年新報に次の

記事を寄せられた。

型破りの禅問答

新命住職・黒田武志氏

十一月二十八日午後一時から落慶式（大導師・岩本總持寺貫首）と、新命住職黒田武志氏の晋山上堂、本尊釈迦如来の御前立不動明王の報恩諷経（導師・山田永平寺副貫首老師）等の大法要が厳修された。

黒田武志新命住職の晋山上堂は、法語を唱えるにも、禅問答をするにも誠に男性的で大音声をあげ、威風凛々としていた。ことに注目を集めたのは須弥壇上での禅問答の応答が、意表をつく型破りであった点であろう。仏祖の聖句や和歌、道歌などを朗々と引用して答えとしていた。随喜寺院は驚き、且つ感心し、参列した檀信徒はうっとりと酔い、あるいは感動に頬を上気させているようであった。

たとえば……

――成寿山頭獅子住するや否や

「身を削り人に尽くさん　スリコギのその味知れる人ぞ尊し。獅子はいたるところに住す、行住坐臥を観ずべし」

――いかなるかこれ涅槃（ねはん）に臨まんしとき

晋山式（昭和47年）

「人々分上豊かにそなわれりといえども、修せざれば現れず証せざれば得ることなし。言語に戸惑うことなかれ、ただ仏祖の行履を行ずべし」

――タイ国ワットパクナムでの修学、何を道取せんや

「飯に逢うては飯を喫し、茶に逢うては茶を喫すべし」

――南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧そもさん

「にごりなき心の水にすむ月は　波も砕けて光とぞなる」

――いかなるか晋山上堂の一句

「春は花　夏ほととぎす　秋は月　冬雪さえて涼しかりけり」

黒田新命住職は、問答のしめくくりに、

「もし人ありて、新善光寺和尚、この山に住して何の境涯があると問わばこたえん」

と自問して、もう一度、

「身を削り人に尽くさん　スリコギのその味知れる人ぞ尊し」

を自答したのであったが、これが実によく効いて（生きて）人々の胸奥に浸み透っていったと思われた。庶民にわかりやすい言葉で禅問答をする、香語を唱えるということが、今後の禅界の課題ではないだろうかと考えさせられたりもした。

この大法要に、黒田新命住職と總持寺特別僧堂、同安居の第一期生（昭和

三十八年度）が全員集まり、また駒沢大学・大学院時代の旧友も全国各地から駆けつけていた。旧友の一人は、

「黒田君が須弥壇上にのぼったとき、涙が出てならなかった」

と眼を赤くしていたし、黒田新命住職も、「坊さんになってよかった」

と法悦に包まれた感激を素直に述懐していた。

元来禅問答は素人が聞いてわかるものではなく、我の世のものではないように度外視されていた。しかし、黒田新命住職のように、庶民にわかりやすい言葉で禅問答をすることが、いかに新鮮な印象と感銘を与えるかということがわかり、この催しは、古今を通しての一つの革新であると筆者は大書する。

黒田氏を、ただものではないとかねてからみてきたが、これでまたその感を深くした次第――

新聞にこのようにあるように、当時私の禅問答はかなり型破りなものだったようです。

しかし私には、一般の老若男女が聞いてもさっぱり意味のわからないようなことでは、仏の真の教えをどうして広げていけるだろうかという気持ちがあり

ました。

どうやら最初から、革命児としてスタートを切ったようです。

さて、こうして善光寺は産声をあげ、私にできることは、誠意を尽してひたむきにことにあたる信念と実践のみ。お葬式や法事など、日常を支える厳粛な儀式では、単に形だけで終わらせず、その意味をお年寄りからお子さんにまでも理解できるよう、わかりやすく説くことから始めました。お通夜では生死について説き、葬儀にあたっては曹洞宗の方式に従って、「剃髪(頭髪を剃り落とすこと)」によって煩悩(心身を悩ましし、悟りを妨げるいっさいの欲望)を除き、懺悔によって心を浄め、三宝帰依(仏・法・僧を信じること)によって心を定め、戒律を守ることによって生活の純化をはかる「受戒」の意味を教え、肉親の死に悲嘆し揺れ動く遺族の気持ちを慮り、故人はきっと御仏に救われ護られて、召されて赴かれたことを申し上げ安心に導くようにしました。ただ読経するだけでなく、ひとつひとつの意味を説きながら、死者を仏弟子として成仏に導くとともに、「安心」を与えることが僧侶としての私の勤めだと思ったからです。葬儀は、仏弟子としてみ仏のもとに送る旅立ち、そのお手伝いをするのが、寺であり、僧であります。そうした認識と信頼を檀信徒の方々に持っていただきたかったのです。

これだけでは本来の寺院としての役割を果たしたことにはなりません。〝死者

を送る場所〃〃お年寄りばかり集まる場所〃ではなく、老若男女国籍問わず向上するために誰でも自由に出入りできる開かれた研修センター（かつて師父の起こした小さな寺のように。次兄のロサンゼルス禅センターのように）であること、また心やすらぐ場所であることなど。その第一歩として子どもたち対象の日曜学校を開くことにしました。幼い心にある思いやりややさしさの芽が大きく育ってほしいと願いました。仏さまのお話をわかりやすくした紙芝居、仏教の聖歌の練習など、いつの間にか一人二人…日曜ごとに子どもたちの人数は増えていきました。子達にはお母さんも一緒です。

今まで日常生活とは関係ないところにあった「寺院」。寺と檀信徒、檀信徒同志の心の触れ合い、コミュニケーションを深める場として日常的に親しんでもらえるよう、次々と数々の行事を設けることにしました。そして諸行事が定例となりました。

【週間の行事】

●写経会　●一般参禅会　●茶道教室　●少林寺拳法参禅法話会　●書道教室

●仏典研究会　●ボーイスカウト　●坐禅会

ほか

【年間の行事】

●新年祈禱会　一月十日

●節分会　二月三日
●開山会　二月七日
●青年会総会　二月二十一日
●春彼岸法会　三月十九日
●花まつり法会（婦人会総会）　四月八日
●婦人会研修会　五月十日
●不動明王大祭（大般若法会）　五月二十八日
●大施食法会　七月九日～十日
●棚経（お盆供養）　七月十三日より
●本寺光真寺参拝　七月二十三日（一泊）
●医事・身上相談　九月十五日
●秋彼岸法会　九月二十一日
●七五三祈禱会　十一月十五日
●お茶会　十一月二十五日
●成道会　十二月八日
☆『成寿』（善光寺機関誌）発行（不定期）
☆『論文集』ほか刊行物の発行

昭和60年　茶会

これらの行事には、必ず法話を行い、悩み、苦しみに、少しでも最善に導くことができ、ひと筋の光を差し込ませることができればと考えました。また、くつろぎの楽しさの中から真理を見つけてもらい、福引やバザー、いろいろな芸能人を呼んでは清興などを催し、しばし「寺」の存在を忘れ、心がふれ合い、人の憩う場所であることを知っていただこうと思いつくまま、できることをやって行こうと精一杯でした。ボーイスカウトや企業、大学への講演も、依頼があればどんな遠いところへも積極的に出掛け、「医事相談」などは防衛医科大学教授中村治雄先生（善光寺檀信徒総代）が、毎年敬老の日に無料診断をしてくださるようになりました。これによって、何人もの方が早期発見できたというのを聞き、本当によかったと思いました。

開創五周年目には、記念事業も計画できるほどになりました。

記念講演のハナ肇氏

趣意書

「身をけずり人に尽くさんすりこぎのその味知れる人ぞ尊し」

この聖句は、永平寺御開山道元禅師のお言葉であります。この句の通りに、世のため人のためにご尽力下さっている当成寿山善光寺住職黒田武志師が、寺を開創致しはや五年目を迎えようとしております。

つきましては、記念行事として、総代及び世話人関係者一同で、本尊脇仏、

文殊菩薩（智慧の仏様）、普賢菩薩（慈悲の仏様）と境内に慈光観世音菩薩（仮称）の建立を発願いたしました。

冀くは趣旨にご賛同下さいまして御外護と御芳志を賜りますよう伏して懇願申しあげます。

昭和四十九年吉日

成寿山善光寺開創五周年記念事業委員会

発起人代表　桜井信平

発起人一同

光は光を呼ぶ――私を信じ、寺に親しんでくださる地域の方が口コミで一人、二人と増えていきました。五年たったばかりの寺への、尊いご支援、最初はゼロだったお檀家も、五年、十年、ご近所の熱心な檀信徒のみなさまにお力もいただきついに、釈迦殿の建立誓願を起こすことになりました。

成寿山善光寺釈迦殿建立大勧進趣意書

善光寺住職　黒田武志　敬白

恭しく惟れば、大聖釈迦牟尼世尊竺土に大悲の願を発せ給い、無明惑業の

釈迦殿落慶式

巷生死に苦悩する諸々の衆生を転迷開悟せしめ、人天菩薩の楽土に引摂せさせ給いてより二千五百歳、中国を経てわが日本に伝来して一千三百年、仏陀の聖教はわが国文化の源泉となり、国民精神の活力となって、甘露の慈雨は周ねく衆生の苦難を救済して、津々浦々に宝塔は洽く今日の仏果をおさめてまいりました。

然りと雖も、時に薄福少徳の衆生あって仏法を冒瀆し、罪障なお深くして三宝を謗り正法を危殆に頻せしむるの憂いなしとしないのであります。世情の危きを思えば転自誡懺悔の涙を禁じ得ぬものがあります。

沙門黒田武志深くこれを憂え、具に慮り、非才を顧りみず仏恩にむくいたてまつらんことを発願いたしました。武志さきに駒沢大学仏教学部並びに仝大学院に禅学を修め、両大本山に安居修行し、ついで托鉢行脚による日本一周を決行し、再度大本山総持寺に拝登して特別僧堂に掛搭することにより本山修行前後通算五年、さらにタイ国ワットパクナムに在って南伝仏教の比丘行を履践して一ケ年、帰国して管長高階禅師の侍者一年、そしてアメリカ、ロスアンゼルス禅センターに在つて弁道し、異邦碧眼の衆に菩提達磨の禅を説いて二年、かくして内外の行を累ね、昭和四十四年帰国し、横浜市日野山麓に成寿山善光寺を開叢いたしました。開山に本師黒田白純大和尚を迎え、開基に篤信の人村岡満義氏を推戴し、多くの檀那の浄財施入を受けて

法堂を創し、以て現在の寺院の結構をみるに至ったのであります。武志日夜微力を效して弁道精進して十年、檀信の施主は壱千六百余を算え、篤信の善男善女は誠心を以て三宝に皈依し、日々の光明は耀々たるを覚ゆるに至りました。

然る処、参集する堂宇は漸く狭隘を覚え、葬儀、法要、その他諸々の行事に支障多くして困難著しく、位牌、安骨の堂も既に充満し、拡張を訴うるに至りました。仍って住持は檀信の願いを聴き、これに応えるため次の計画を立案いたしました。申し述べる迄もなくこれが実現に当っては広く檀信徒各位の参与を煩わし専門の力を藉り、慎重に調査し審議を経なければならないこと言を俟ちません。

茲に建立される仏殿堂塔こそは、み仏の功徳力、仏光明を普ねく永遠に光被せしめ、檀越各家先亡の精霊をこゝにまつり、日々飲食を供え、焼香供養して荘厳仏土を現じ子々孫々に承け伝えて魂の依処たらしむるものであります。また参禅会、医事相談の実施、婦人会の運営等により心身両面の健康増進、信心の培養、道念浄行の高揚をはかり、ひいては世界の平和、人類の福祉に貢献せんとするものであります。

如上の趣意を深く肝銘せられまして布施、勧進の浄行にご賛同あらせられますよう伏而懇請申し上げ勧進の趣意といたします。

タイ国ワットパクナムにて

維時　昭和五十五年四月吉日

別記

一、善光寺釈迦殿建立計画

堂宇の名称、規模

釈迦殿、禅堂、庫院、衆寮、舎利堂、その他

総延面積　五四〇・二四平米（一六三・四〇坪）

（一F　二四一・四四平米、二F　二四一・四四平米）

二、建築の様式

鉄筋、鉄骨コンクリート全二階建

三、設備及び機能要領

（イ）大須弥壇中央釈迦如来安置、左右に仏祖及び先亡精霊位牌安置等

（ロ）禅堂　坐禅諸設備一式収容見込　一〇〇人

（ハ）庫院　僧侶、檀信徒用接待、集会用諸設備

（ニ）衆寮　住侶並客僧の接遇諸設備

（ホ）舎利殿　位牌、安骨等の諸設備

（ヘ）各種荘厳一式　仏具、仏典、宝物資料等の格納設備

（ト）事務所、機械室、倉庫等施設

昭和五十五年三月より善光寺機関紙「拈華」を発行

粛啓

この度成寿山善光寺におきましては、仏事法要、坐禅会、青年会、婦人会、その他大小の集会に、現在堂宇の狭隘なるを痛切に感じられ、また、位牌、安骨堂は既に充満して拡張を必要とする状態となり、寺としては今後の寺院活動等を考慮せられまして、住職黒田武志方丈様は別紙趣意書のとおり新らたに伽藍釈迦殿を建立する計画を樹てられました。

このことは、私共檀信徒といたしましてもまことに時宜を得たお企てであり、是非これを達成していたゞきたいと念願するものであります。

ご承知のように、菩提寺は、み仏の功徳力を仰ぐ心の依所であり、永遠に先祖のみ魂を祀り、供養いたします霊堂でありますから、私共檀信徒の合力によってなしとげたいと思うのであります。是非みなさま方の篤信のご協力をお願い申し上げます。

何れ詳しい計画内容はお知らせ申し上げますが、昭和五十五年よりおおむね三ケ年計画をもって浄財のご寄進を仰ぎたいという考えであります。

檀信徒の皆さまにおかせられては色々ご意見やご事情もあおりかと存上げますが、それらを忌憚なく委員会へお漏しいたゞきたくお願い申し上げます。

寺といたしましても機会をつくり各家を順次お訪ね申し上げご説明ご理解を得たいということでありますのでご了承賜りたいと存じます。

以上申し述べまして新伽藍建立への格別のご援助を賜りますよう伏してお願い申し上げます。

昭和五十五年五月吉日

成寿山善光寺釈迦殿建設委員会

委員長　西島　一郎

昭和五十七年十一月には釈迦殿の落慶式がとり行われました。

成寿山善光寺　開創十五周年記念事業特別勧募について

今年は、成寿山善光寺開創十五周年にあたります。寺基愈々堅く、寺運益々興隆のこの機に、記念事業として、釈迦殿本尊の脇仏と『大般若経』六百巻の勧請を発願いたしました。

つきましては檀信徒の皆様の浄信をいただき、勧請発願を円成いたしたく奇特の御協賛を賜わりますようお願い申し上げます。

一、釈迦殿本尊脇仏の勧請

釈迦殿の本尊は申すまでもなく、釈迦牟尼仏でありますが、お寺の本尊仏には脇仏が必要なのであります。そして釈迦牟尼仏の脇仏は、文殊・普賢の両菩薩であります。

開創十五周年記念式典

仏様の御徳は悲智円満といわれ、慈悲と智慧とを円満に兼ね具えているのであって、それを、文殊菩薩が智慧、普賢菩薩が慈悲を象徴しているのであります。脇仏を随えてこそ、本尊仏として御威光がいよいよ輝きを増すのであります。寺檀の今後一層の繁栄を祈念して本尊脇仏の勧請を発願した次第であります。

二、『大般若経』六百巻の勧請

『大般若経』は、仏教経典の中でもっとも長いものであり、且又、霊験のあらたかなること経中の王と称されており、わが国では古来より、鎮護国家の御祈禱から庶民の除災招福の祈願のために大般若会が修行されて参りました。

身代り不動明王を奉祀しております当山においては、従来『大般若経』第五百七十八巻「理趣分」を読誦するだけで祈禱をおこなっておりましたが、『大般若経』六百巻の転読が伴わないと大般若会としての真の儀式作法とは申されません。

その広大なる功徳力を仰ぎ、檀信徒各家の弥栄を祈願いたしたく『大般若経』六百巻の勧請を発願いたしました。

昭和五十八年九月吉祥日

善光寺住職　黒田　武志（大圓）

このように開創して十五年の間に、本殿および客殿が完成し、昭和五十七年

昭和60年11月28日
本尊脇仏開眼

（一九八二年）にはかねてから念願だった釈迦殿を建立。大般若経六百巻もそろいました。

昭和五十九年九月、開創十五年目にあたる年には、〝緋の恩衣〟を着用することができる栄誉に浴しました。（注・恩衣は、資格衣、または道具衣ともいい、導師となる資格を具備した人だけが着用できる衣。緋衣・黄衣・赤紫衣があり、緋衣は四十五歳以上で優れた経験のある人にだけ資格が付与される。）

これらはひとえに、み仏のお導きと檀信徒のみなさまのご信心のおかげと肝に命じました。緋恩衣特許せられる八ヵ月前。その年の新年に、「ちょうど十五周年という節目を迎え、何とかみなさまにご恩返しができないものか」と考え続けておりました。

私は、ご報恩行の一端として海外に留学僧を派遣し、人材の育成をはかり、もって、仏教を振興し、世界の平和、人類の推進に寄与したいと発願。

海外留学僧派遣育英会（後に横浜善光寺留学僧育英会と改称）はこうして昭和五十九年（一九八四年）一月十五日に発足したのでした。私はその年に緋恩衣の着衣が許されたのも、私の念願成就に対し、み仏の力強い応援のように感じたものでした。

昭和六十四年（平成元年）には、人間でいえば成人式にあたる、開創二十周年を迎えることができました。この時の思いを次のように趣意書にまとめました。

昭和59年　托鉢行

開創二十周年記念事業趣意書

この地に在った小庵を譲り受けて仮本堂を建てたのは今から十九年前のことであります。正にゼロからの出発でしたがみ仏の御加護と檀信徒の皆様の絶大なる御協力御支援により今日の盛栄を招来することができ感激にたえないところであります。

思えば昭和五十七年に釈迦殿が完成して当寺は面目を一新し、翌年開創十五周年記念として釈迦殿本尊の脇仏の制作及び大般若経六百巻を新添し五十九年には海外留学僧派遣育英会の設立、そして六十年より留学僧の派遣実施という数々の事業を展開し、今や当寺は国内外から注目を浴びております。

さて、明年は開創満二十周年に正当します。これは人間でいえば成人でありますので、この節目を記念して次の事業を実施いたしました。今後さらに一段の進展を期する跳躍台としたい所存であります。

その事業の一環としてまず昨年、身代不動明王の眷属（けんぞく）、矜羯羅（こんがら）、制吒迦（せいたか）の二童子像の制作を大仏師錦戸新観先生に依頼し、昨年十一月二十八日、開眼供養をおこないました。

次に、タイ国ワット・パクナムより釈迦牟尼仏の尊像をご寄付いたゞきましたので、四月二日に開眼供養を厳修いたしました。又、かねてより依頼しておりました大日如来尊像が完成しこの秋不動殿に奉安いたしました。これ

仏師・錦戸新観師と黒田方丈

タイ国釈迦牟尼仏

も偏えに皆様のお陰と厚く御礼申し上げます。

就きましては、右記念事業展開のため、未だお申込み頂かない方は何卒御協賛くだされ、浄財の御喜捨を伏してお願いする次第であります。

昭和六十三年十二月吉日

善光寺住職　黒田　武志
実行委員長　富永　豊重

これに応え、快くご協力してくださった皆様のおかげをもちまして、二十周年記念事業の数々は首尾よく円成することができました。五月二十四日にはその締めくくりといたしまして、大雄山最乗寺山主余語翠巌老師を大導師に拝請し、また、文学博士・東隆眞先生に記念講演をお願いして、二十周年式典法要を実施いたしました。二十年という、人生でいえば大きな節目となる年に、〝平成〟という新しい年号となり、気持ち新たに、そしてさらに引き締まった思いがしたものでした。

そして五年たち、開創二十五年。このときは、四半世紀という月日の重みを感じました。二十五周年記念事業趣意書には、次のように書かせていただきました。

二十周年記念式典

開創二十五周年記念事業趣意書

仮本堂を建てて「善光寺」と命名してより、はや四半世紀を閲しました。まことに光陰矢の如しというべく、月日のたつのは早いものであります。

今日を迎えられましたこともこれひとえに仏天の加護のもと、檀徒の皆様の絶大なる御協力ご支援の賜物で、感謝感激にたえないところであります。

思えば開創して十五年間は釈迦殿の建立整備に向っての寺檀一体の精進の日々でした。

昭和五十七年めでたく釈迦殿が完成しましたので、翌年開創十五周年を記念して、本尊脇仏造顕、大般若経六百巻を勧請し、その報恩行の一端として翌々五十九年に海外留学僧派遣育英会を設立し、六十年より留学僧を派遣し今日に及んでおります。

ついで平成元年、開創二十周年にあたり、主として不動殿の整備を記念事業とし、大日如来像をはじめ、薬師・阿弥陀の二如来像及び不動明王眷属（けんぞく）、矜羯羅（こんがら）、制吒迦（せいたか）の二童子像の造立・須弥壇の整備等をおこないました。

何しろ三百年五百年の歴史を持つ寺々の間に伍したことでありますので、矢継ぎ早やではありましたが、さいわい檀家の皆様の御協力により目的を達成することができました。

さて本年は開創二十五周年記念にあたりますので、これまでの締めくくり

台湾短期工業大学で講演後

として次の記念事業を目論んでおります。

一、開創二十五周年記念式典の実施

なるべく大勢の方々にご参加いただくため、五月三十日、大本山總持寺を会場として、梅田禅師様御親修法要と祝宴を予定しております。

二、善光寺留学僧育英会設立十周年記念式典の実施

大韓民国、仏宝宗刹、通度寺方丈老天月下猊下を拝請、三月末当山において実施の予定

三、記念出版物の刊行

イ、留学僧派遣、関係十カ国訪問記、留学僧論文集第二集の刊行

ロ、東野光生先生「臨照図」制作依頼

ハ、「善光寺の歌」CD及びカセット・テープの作成

四、内外の整備

建物・什物等の小修理

就きましては右記念事業実施のため、総額三千万円の予算を計上いたしましたので、何卒ご協賛くだされ、浄財の御喜捨を伏せてお願い申上げる次第であります。

二十五周年式典は大本山總持寺で次のような内容でとりおこなわれました。

「善光寺の歌」CD

開創二十五周年記念の祝典

「法燈の国際化」に称賛

成寿山善光寺開創二十五周年の記念式典が五月三十日午前十一時から、横浜・鶴見の大本山總持寺において、檀信徒五百人余の皆様が参集して盛大に行われました。

善光寺は昭和四十四年、ゼロから出発して二十五年の間に、幅広い活動とともに、開創十五周年を記念して設立した「横浜善光寺留学僧育英会」を通して国際的な育英事業を展開しており、日本佛教の新しい生き方として海外からも注目されています。

總持寺大祖堂で記念法要

記念行事は、總持寺大祖堂での記念法要で始まりました。法要に先だって、留学僧育英会常務理事の佐藤俊明老師（千葉県柏市・龍光寺住職）が法話を行い、引き続いて大本山總持寺貫首・梅田信隆禅師さまの御親修により法要が営まれ、『修証義』読誦の中を参列した檀信徒全員が、佛祖の真前に焼香しました。

記念式典

大祖堂地下の瑞応殿での記念式典は、式典副委員長の越石周平氏（善光寺護寺会長）が開式の言葉を述べ、まず、来賓として出席された大本山總持寺

開創二十五周年記念式典（総持寺瑞応殿）

の斎藤信義監院が總持寺と善光寺の深い因縁を話して次のように祝辞を述べられました。

「善光寺開山の黒田白純老師は昭和二十六年に總持寺副監院として、当時の渡辺玄宗禅師、大道英仙監院をお支えいただいた。

本山が能登からこの地へ移って八十四年の歴史がある。戦後一番苦労されたのが渡辺禅師であり、弧峰智璨禅師だ。その時に黒田老師が御尽力された。この方が善光寺の御開山でありその心を継いだお弟子様方が、善光寺方丈をはじめ皆さん御活躍されている。

善光寺様は法燈の国際化を目指して育英会をやっておられる。このような華々しい活躍をしているのは宗門では善光寺様だけだ。この瑞応殿に〝法堂上に鍬を挿む人を見る〟という瑩山禅師の最期のお言葉が掛かっており、日々この言葉を重く受けとめているが、善光寺様はこれを実践しておられる」

また鶴見大学の髙﨑直道学長は、

「欧米では二十五年を区切りとして銀の祝いとする。本日は善光寺とお檀家さんの銀婚式だ。新しい寺を開かれ、しかも二十五年の間に檀信徒三千家を持たれたことは大変なこと。行の実践は当然のことのように見えて、なかなかできない。発菩提心の人を菩薩というが、菩薩の行を実践しておられるのが黒田老師である。法華経の中に常不軽菩薩という方がある。黒田老師は、

全ての人に佛の心があり、共どもに世の中をよくしていこうという願いを持っておられる方だ」

と、黒田住職の願行を讃えました。

さらに、天台宗総本山比叡山延暦寺の今出川行雲教化部長は、故・山田恵諦座主と善光寺との法縁に触れながら、

「山田座主は世界に向かって佛教者は何を成すべきかを常に説かれていた。そして善光寺留学僧育英会に注目し、私を身代わりにして黒田さんに急接近した。黒田さんの仕事は世界に向けての人づくりだと思う」

と、善光寺の育英会を高く評価して、祝意を表わしました。

開基家の村岡有尚氏、総代代表の伊藤喜三郎氏、檀信徒代表の大津正二氏らに感謝状、表彰状が贈呈された後、善光寺総代で防衛医科大学教授の中村治雄氏が、「長生きの秘訣」と題して記念講演を行いました。

中村氏は、①塩分をできるだけ控える。②油の質を選び、固まっている油は減らす。③繊維の多い野菜・果物をたくさん食べる。④できるだけ身体を動かす――などユーモアを交えて健康の基本を話しました。

式典委員長の伊藤喜三郎氏が「日本の佛教の中でも善光寺ほど檀信徒が増えた寺はないそうだ。育英会に対する方丈様の情熱が実を結んできた。必ずや世界平和に貢献すると思う」と挨拶し、本寺の栃木県大田原市・光真寺住

職黒田俊雄老師は「皆さんの御理解と情熱に心から御礼申し上げる。善光寺方丈とは兄弟だが、育英会の浄行に対して感謝している」とお礼の言葉を述べました。

祝電はタイ国ワット・パクナムのプラ・タム・パンヤー・ボデー住職、韓国曹溪宗通度寺の老天月下方丈、ロサンゼルス禅センターの前角博雄主管、曹洞宗ハワイ開教総監部の松浦玉英総監、南米開教総監部の森山大行総監など海外からも寄せられました。

記念の祝宴

三松閣に会場を移しての祝宴では、開基家・村岡弘義氏の挨拶に続いて黒田住職が、

「皆さん本当に有り難うございました」と感極まった様子で謝辞を述べ、善光寺育英会十周年の記念出版『法燈の国際化をめざして』を手がけた神奈川新聞社出版局長の宮川康吉氏が開創二十五周年を祝う乾杯の発声を行いました。

そしてとうとう今年・平成十一年、三十周年という年を迎えることとなりました。はじめに、言葉ではいい尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいですと書きましたが、まさに、みなさまのおかげで生かされ育てられ、しみじみありがたく、幸福な思いに満たさせていただいております。

開創二十五周年を記念し「法燈は海を越えて」を発刊

善光寺が三十周年を迎えると同時に、留学僧を派遣して、世界平和に寄与したいという大誓願を立てたときのように、信念を持って、大きな記念事業を実施していきたいと願い、趣意書を書かせていただきました。

これから三十五年、四十年、半世紀へと向かっても、初心を忘れることなく、生かされている生命を仏法のため、人のために使い、一滴残らず使い切ってから一生を閉じたいと思います。

身をけずり人に尽くさんすりこぎの
その味知れる人ぞ尊し

佛教の興隆による世界平和を実現する人材づくり――この事業を今後さらに発展させ次代の若者に引き継ぐため、善光寺一丸となって一層の努力を続けてまいります。法縁で結ばれた皆様の厳しい叱咤激励、変わらぬ温かいご支援を心よりお願い申し上げる次第でございます。